

## 私の大切な妹

小 六

「一年生の入場です。」

「いよいよ、入学式が始まる。私は、妹の手をつないで入場する。さわがないでいられるだろうか。ちゃんと手をつないでくれるだろうか。」

私の妹は、生まれてすぐダウン症と診断された。父と母は、毎晩泣いていたが、お医者さんにはげまされ、がんばって育ててみせると決意したそうだった。

そのころの私は、ダウン症という意味も理解できずに、妹ができたことを喜び、保育園の友達やそのお母さん、先生など周りのみんなにしつこいぐらい「赤ちゃんができたんだよ。でも、な

んかの病気なんだって。」

と話していた。ダウン症になると、染色体に問題があり、成長

がおくれたり、いろいろな障害をかか

えたりしてしまう。妹は、生まれてす

ぐには家に帰ってこられなかった。母

と妹は、しばらく入院していた。ちよつ

とさみしかったが、父も一生けん命働

いていたので、「さみしい」の一言が

言えなかった。そのため、ストレスで

湿疹が出て、病院に一晚泊まったこと

もあった。

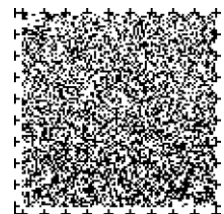
妹が退院してきた時は、本当にうれ

しかった。かわいくて、かわいくて、

たくさんだっこした。でも、かわいい

だけではない。妹は、話し始めるのも

おそく、言いたいことが伝えられず、



よく怒って私の顔をひつかいた。お風呂に入るとヒリヒリするし、私の顔にはいつもひつかき傷があった。

学校から帰って、母に話したいことがあって話そうとすると、ちようど妹の世話をしている、言い出せなくなっ  
てしまうこともあった。ただ、不思議なことに、妹がきらいになったり、い  
なかつたらよかつたのに、と思ったり  
したことは一度もない。

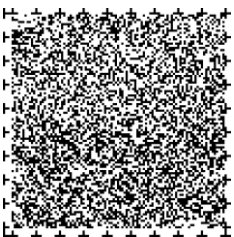
私は妹のことが大好きだし、妹が笑うと私も幸せな気持ちになれる。私は妹からたくさんの喜びをもらっている。なかなか話せるようにならなかつた妹が、初めて私のことを

「ねえね。」  
と言ってくれた時。保育園の運動会で、

前回りをみごとに決めた時。助けも  
らいながらも登り棒を登り切った時。  
あの、何もできなかった妹が、一つず  
つ成長していくたびに、私や私の家族  
は、大きな感動をもらえる。

私が一番つらいのは、  
「妹さん何の病気なの。大変ね。」  
と言われたり、周りの人が妹のことを  
話しているのが、聞こえたりしま  
う時だ。妹がダウン症なのは事実だし、  
相手が悪意をもって言っていないのは  
分かっている。だから、笑って、

「そうなんです。」  
と答えるようにしているが、やっぱり  
ひっかかってしまう。それから、  
私達が一緒にいると、どうして  
も視線が集まってしまう。妹は、



変な動きをしてしまうことがあるので、目で追ってしまふのは仕方ない。私達は家族なのだから気にしない、気にならない、と思いこむようにしているが、何となく気になってしまふ。そんな時、私はもつと強くならなくてはと思う。

私はよく人に、

「妹のめんどろをよく見て、えらいね。」

と言われる。ちよつとはうれしくなるが、それはちがう。私は確かに妹を支えているが、私も妹に支えられているのだ。妹のおかげで、いろいろな感動をもらえるし、優しい気持ちにもなれる。私は妹が今の妹でいてくれるから、大好きなのだし、大切なのだと思う。私は、私の家族は幸せだと思う。

さあ、いよいよ私達姉妹の入学だ。入学おめでとう。一緒に成長していこうね。よし、胸をはって堂々と入場だ！

